図書館だより

２０１９年　（令和元年）
１１月２０日　・　水曜日

第２５号（読書感想文号）

北海道旭川永嶺高等学校
図　書　局

小原優月さんが　優良賞受賞

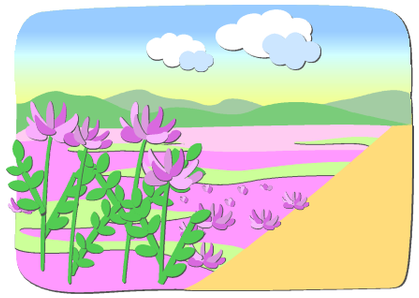
小原優月さん（２年４組）が第６５回青少年読書感想文全道コンクールで優良賞に入賞しました。おめでとうございます。素晴らしい読書感想文ですので、全文を掲載します。ぜひ、お読みください。

空の彼方

「空の彼方」とはどこか。空の向こう側という意味であり、この短編集の登場人物に次々と手渡されていく結末の書かれていない小説の題名である。私は、果てしなく続いて終着点はないと思う。しかし、読み終えた後に考えてみると一人一人の終着する場所は、自分で見ることはできないが既に決まっているのだと思った。

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、著者である湊かなえさんの書く本が好きだからでもあるが、それよりも題名に興味を持ったからである。『物語の終わり』と最初にこの題名を見たとき、私はあまり理解できなかった。大抵の題名ならば、見た段階で少し予測できたりするのだが、全くといって良い程予想できなっかたため読んでみようと思った。この本を読んで、短編集であるのにすべての話に連続性があることに驚いた。それぞれの人の状況に合わせてラストは異なり、様々な悩みを抱えている人々が『空の彼方』という作品を読んで、自分と向き合うことで自分なりの答えを見つけ、次に悩んでいる人にその作品を受け渡していく。といった構成は新鮮で面白かった。その作品を渡された人は大きな悩みを抱えている人ばかりで、自分が悩んでいることは小さいと感じた。それと同時に、自分自身が作品を受け取ったときどう思うのだろうと疑問に感じた。『空の彼方』はページ数が５０ページくらいの短い話であるのに、人々の悩みを解消していけるのは素晴らしいことだと思う。そして、この本に出てくる人はみんな北海道へ行く。

この本を読んでから北海道は雄大な自然が魅力的な所だと改めて気づかされた。また、自然に思いを馳せて読むと言葉を失ってしまう。自分はこんな場所に住んでいるのだと思い、すごいと感じた。



「僕は夢を捨てて家業を継ぐのではない。僕の魂が求めている作品を生み出すために、敢えて、夢を突き放すのだ。」これは、花咲く丘に出てくる主人公の言葉だ。

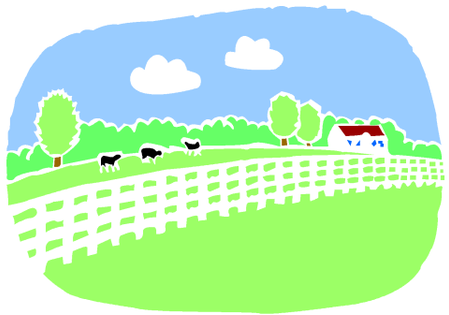
私は、まだ夢を持っていないし捨ててもいないから言葉を発した時の感情や表情を想像することは難しいけれど、格好良いと思った。「夢を捨てる」のではなく「敢得て突き放す」と表現することで言い訳に聞こえない。

この言葉は本気で夢を追いかけようとしたが諦めざるを得なくなって、悩みに悩んで考えて出た言葉なのだと思う。そう考えるとやはりこの言葉は格好良いし、この人の生き方も格好良い。夢を持ったときに、こんな言葉が胸を張っていえるような努力をしたい。

湖上の花火に出てくる、「主役を男女反対にして書き換えられる？」という言葉。著者が性別を決めて書いているのだから逆にして読むべきではない。だが、一点から見るだけではみた以上の感動や発見は生まれない。

一点だけではなく、他の観点から見ると新たな発見が生まれた。逆にすることで言葉の内容も変化し、話の展開も変化した。『空の彼方』は、結末が書かれていないため様々な可能性が考えられる。書き換えることはできなかったものの、その作品についてより深い解釈と作品に対する意見を具体的に持つことができた。沢山の観点から作品を見つめたことで深い解釈が得られるのならば、長い時間をかける価値はあるし自分の人生のどこかで活きてくることもある。次に新しい本を読むとき実践してみようと思う。

この本の最後のほうに「おばあちゃんは窓越しに空を見上げた。北国の夏の夕方の空は、まだ高く青い。」という分がある。きっとおばあちゃんにとっての『空の彼方』とは、北国の夏の夕方の空の向こう側にあるのではないのか。誰も自分にとっての『空の彼方』は分からないと思うが、感じることはできる。おばあちゃんも自分の『空の彼方』を分かってはいないが、その場所だと感じている。感じ取れる人は、人生を謳歌しているからなのだろうか。それならば、私はまだ今の生活ですらまだ謳歌できていないかもしれない。待ちの姿勢では到底達成することはできないので、自分から日々の生活を楽しみいつか人生を謳歌できるようになりたい。



本を読み終えて改めて『空の彼方』を考えてみると、終着する場所は決まっているので、それまでの道は自分で切り開いていくものだと思った。人によって終着までの行き方や方向は変わるけど、その場所を導くのは自分自身だ。わたしはできるでけ遠い場所に終着したい。そのために思ったことをそのままにせず、やりたいことをやって自分に正直になって終着したい。